

2025年度 神戸大学 第2問（一部抜粋）〔問題編〕

「神大古文のみかた」の回となりました。2025年の神大国語の第2問を取り上げてお話をしていきたいと思えます。今回の問題は菅原孝標女『更級日記』についての問題です。さあ、1週間、しっかり問題を考えてみてください。

〔一〕 次の文章は『更級日記』の一節で、作者が父の任地であった上総国から帰京し、都での生活が始まった場面である。これを読んで、問一～二に答えなさい。

ひろびろと荒れたる所の、過ぎ来つる山々にもおとらず、大きに恐ろしげなるみやま木どものやうにて、都の内とも見えぬ所のさまなり。ありもつかず、いみじうものさわがしけれども、①いつしかと思ひしことなれば、「物語もとめて見せよ、物語もとめて見せよ」と母をせむれば、三条の宮に、親族なる人の衛門の命婦みやうぶとてさぶらひける、たづねて、文やりたれば、珍しがりて喜びて、御前のおろしたるとて、わざとめでたき草子ども、硯すずりの箱の蓋に入れておこせたり。うれしくいみじくて、夜昼これを見るよりうち始め、またまた見まほしきに、ありもつかぬ都のほとりに、②誰かは物語もとめ、見する人のあらむ。

継母まははなりし人は、宮仕へせしがくだりしなれば、思ひしにあらぬことどもなどありて、③世の中うらめしげにて、ほかにわたるとて、五つばかりなる児どもなどして、「あはれなりつる心のほどなむ、忘れむ世あるまじき」など言ひて、梅の木、つま近くて、いと大きなるを、「これが花の咲かむ折は来むよ」と言ひおきてわたりぬるを、心の内に恋しくあはれなりと思ひつつ、しのび音をのみ泣きて、その年もかへりぬ。いつしか梅咲かなむ、来むとありしを、さやあると、目をかけて待ちわたるに、花もみな咲きぬれど、音もせず。思ひわびて、花を折りてやる。

〔A〕 たのめしをなほや待つべき霜がれし梅をも春は忘れざりけり
と言ひやりたれば、あはれなることども書きて、

なほたのめ梅の立ち枝はちぎりおかぬ思ひのほかの人もとふなり
〔以下略〕

（『更級日記』より）

〔注〕

○衛門の命婦—本来、命婦とは中級の女官のこと。作者の親類に、このように称された人がいたのであろう。

○御前のおろしたる—貴人が使った本が下賜されたもの。

問一 傍線部①～③を、それぞれ分かりやすく現代語訳しなさい。

問二 傍線部〔A〕の和歌に込められた心情を、五〇字以内で述べなさい。

2025年度 神戸大学 第2問 (一部抜粋) [解答解説編]

【解答】

問一

- ① 私は、早く物語を読みたい(読もう)と思っていたことであるので、
- ② 誰が物語を探し、私に見せる人がいるだろうか、いや、誰も見せる人はいない。
- ③ 私の父との夫婦仲がうまくいかない様子で、

問二

春に来訪を約束していた継母から春になっても連絡がないので、つらく思い、来訪を待ちわびる作者の心情。(49字)

【解説】

問一

傍線部を現代語訳していく問題。品詞分解をまず行い、文法事項や単語をあてはめ、主体客体の省略などを補いつつ現代語訳を作成していく。

傍線部①について、「いつしか」は「これから起こることについてその時を待ち望む場合」は「早く」「いつか」と訳出する。「すでに起こった事柄について、その時期の早いことに驚く場合」は「いつのまにか」「早くも」で訳出する。今回は、直後の作者の発言である「物語(の本)を探し出して見せてくれ」という内容から、前者の意味であるとわかる。また、作者の発言から、「物語を読みたがっている」と言うこともわかるので、それも補おう。「し」が「過去の助動詞「き」の連体形」であることや、「なれ」が「断定の助動詞「なり」の已然形」であること、「ば」は「接続助詞の順接確定条件(Ⅱ)ので」「であることなどを考慮すると、解答は「はやく物語を読みたい」と思っていたことであるので」となる。

傍線部②について、「誰かは」の「か」は疑問(誰が)か反語(誰が)か、いや誰も(ない)の係助詞を表す。ここでは反語で訳出する。「物語もとめ」は「物語を探し」、「見せる」は「見せる」となり、「私(Ⅱ作者)に見せる」という意味になる。「む」は疑問・反語の係助詞が上にあることから「推量」で訳出する。以上から、「誰が物語を探し、私に見せる人がいるだろうか、いや、誰も見せる人はいない。」となる。

傍線部③について、「世の中」は多義語であり「世間・俗世」「男女の仲」「天皇の治世」などが主な訳になる。継母が家から出て行くくだりのなかでの傍線部なので、「男女の仲(Ⅱ夫婦仲)」の意味で訳出する必要がある。「うらめしげ」については、「うらめしげ」が「恨めしい気持ち」が表情・態度に表れている様子」の意味を持つ。ただ、「夫婦仲が恨めしい気持ち」が表情・態度に表れる」では、現代語訳としてやや不自然である。ここでは、「夫婦仲がうまく行かない様子」とする。誰の話かを補うと、「継母は私(Ⅱ作者)の父と」と補うことが出来る。以上から「私の父との夫婦仲がうまくいかない様子で」となる。

問二

傍線部(A)の和歌に込められた心情を明確化する問題である。

まずは、和歌の解釈をしていく。傍線部(A)の和歌は、作者から継母に対しての和歌であり、梅の

花が咲く頃に作者に会いに来ると約束して去った継母が、花が咲いても来ず、作者が恋しく思っている状況である。内容としては、「(継母が会いに来てくれることを)頼りにしていたのに、やはりまだ待たなければならぬのか。(冬に)霜で枯れた梅も春は忘れず(咲く)ものであるのになあ。(継母は私を忘れたのであろうか)」と解釈出来る。

それでは設問条件に合わせて、心情を確認していく。和歌における心情を問われている問題では、和歌の解釈のみに焦点を当ててはならず、和歌を導く前後の状況も共に確認する必要がある。では、先ほど確認した「状況」と「解釈」を併せて考えてみると「作者の継母を待ちわびる心情」が見て取れる。和歌の下の句から「来ないことを恨む」と解釈してしまうかもしれないが、これは、和歌直前の「思ひわびて」から「来ないことをつらく思う」などにしておく方が適当であろう。

以上の心情を五〇字でまとめるのが難しいが、「梅の花が咲く時期」を「春」とまとめることで字数の短縮を図る。

以上から解答は「春に来訪を約束していた継母から春になっても連絡がないので、つらく思い、来訪を待ちわびる作者の心情。」(49字)となる。